市民が主役

子どもたちへ 夢や希望をのせて絵本を送りたい

絵本作家　ましま　せつこさん

子どもの頃、読み聞かせをしてもらったことはありますか？　登場人物の気持ちになってワクワク、ドキドキした気持ちは、おとなになってからもかすかに記憶として残っているのではないでしょうか。

ましまさんの作品は、日本の伝統的な色彩や形の美しさに加えて現代的なセンスが調和した優しい画風で、親しみやすいことが特徴です。

今号は、「子どもたちに絵本の楽しさを知ってもらいたい」という絵本作家のましま せつこさんに、お話を伺いました。

ましまさんは、1937年に山形県鶴岡市に5人兄弟の長女として生まれ、自然の多い環境で育ちました。絵を描くだけでなく、スポーツも好きで、幼いころは木登りや野球などをして野外で遊び、中学で始めたテニスでは県大会の決勝まで進んだこともあります。

大学卒業後、デパートの広告デザインの仕事に携わった後に、子どもの絵本の世界に入りました。

主な作品には「ママ だいすき」「あがりめさがりめ」（いずれもこぐま社）、「こよみともだち」（福音館書店）、「したきりすずめ」（岩波書店）など、他にも多数あります。

「ママだいすき」（まど みちお文）

絵を描くのが好き

「絵を描くことが好き」と言うましまさん。「植物好きな父親が兄弟に花壇を一つずつ用意し、好きな物を植えて良いと言ったの。花が好きな私は、早速、種を買って植え、チョウやトンボが止まる様子を楽しんで描いていたわ。ポピーの花が咲いた時には、『こんなに美しい物がどうやって土から生まれてくるのか』と不思議で、たまらずクレヨンを取りに行き夢中で描いたの」と幼いころの様子を話されます。

ましまさんの絵に対する思いは止まらず、父親から美術大学への進学を勧められ、東京の女子美術大学図案科に進学し、卒業後はデパートで若い世代向けの広告の仕事に携わっていました。ある時、本屋でたまたま1冊の絵本を見て、「わぁ、自由でいいな」と感激したそうです。「広告の仕事は忙しかったわ。それに、価格や対象とする世代など、作成にあたりいろいろな制約があったので、絵本ならそんな制約がなく自由に描けるのではないかなと思ったの」とましまさん。

絵本について話すときは本当に楽しそうな表情です。

日本の伝統的な美意識

ましまさんは、ある時、実家に帰省すると、蔵のなかに子ども用の古い着物や絵本、おもちゃがたくさんあるのを見つけました。着物は継ぎはぎがされていましたが、鮮やかな色使いの美しさに感動したといいます。居間に戻ると、たまたまラジオからわらべうたが流れていたそうです。

実家の蔵にあった子ども用の着物

「あぁ、昔の子どもはこんな着物を着て、わらべうたを歌っていたのかな、どうやって遊んでいたんだろう」ということに興味を持ち、詳しく調べているうちにその面白さにひかれました。新しさを求める広告の世界にいたましまさんでしたが、古いものの良さに気が付き、「今に生かせないか」と考え、『レコード会社がわらべ唄（うた）のレコードを作ったら』という設定で、そのジャケットを作成し、デザイナーの登竜門である、日本宣伝美術会のコンクールに応募したところ、見事入選したのだそうです。

「当時、わらべうたには誰も見向きもしていなかったので、自分なりに解釈して書いたのよ」とましまさん。その作品が、石井桃子さん（※）の目にとまり福音館書店から最初の本を出したのが絵本の世界への始まりです。

絵本の誕生は、ふとしたきっかけから

「私の描いた絵本は、すべて人との出会いの妙のようなことがきっかけで生まれているの」と言うましまさん。

代表作のなかの、「ママだいすき」は、どのようにして誕生した作品なのでしょうか。伺うと、「子どもとスケッチブックに絵を描いて遊んでいたところを出版者の方がたまたま見て、『絵本にしましょう』と言ってくれたの。子どもと遊ぶためのものだから、と断ったのだけれども、詩人のまど みちおさんがその絵に文章を付けてくれたの」と話されます。

絵本作家は文章を書く詩人と組んで仕事をするそうですが、編集者から送られてきた何冊かの詩集のなかで、一番言葉に魅力を感じたのが、まど みちおさんの作品だったそうです。

また、「まてまてまて」という本ができた時の話もしてくれました。「全ページ赤ちゃんがハイハイしている話なので『これで絵本になるのかしら』と不安だったけれど、友人が赤ちゃんを連れて自宅に遊びに来てね、その赤ちゃんが家じゅうをハイハイして動きまわっていたの」と話されます。

「『えっ！　赤ちゃんってこうやってはうの？』と思わず見ていると、うしろを向いたり伸びをしたり転んだりして愛らしく、それだけで楽しいんだということが分かり、『これならやれそうだな』と思ったの」とのこと。それぞれの絵本には、人との出会いが関係していることが多いようです。

場面一つ一つにも細部のこだわりを表現する

大きな絵を描く時の仕事部屋

ましまさんは、それぞれの話に合わせて絵の描き方を変え、「この本には絵の具が良い」「この場面には貼り絵がいい」などと工夫されています。「貼り絵にする時は、紙すきで作った紙に、古い着物の型で型押しをして千代紙のようなものを作り、それを切って貼るの。数か月で完成するものもあるし、2年越しでやるものもあるわ」との話からは、場面一つを描くだけでもとても労力の要る作業だということが分かります。しかし、ましまさんは、「どの作業も好きなのでいつも楽しいし、一冊の本ができた時やいろいろな反応があった時は面白いわ」とうれしそうな様子です。

子どもたちへ　夢と希望をのせて絵本を送りたい

「お母さん・お父さんたちが幼い子どもを抱っこして絵本を読んであげるので、声とぬくもりが一緒になって体にしみ込むものです。その絵本をつくることに幸せを感じながら描いています」とましまさん。

電子書籍が増えていることについてどのように思っているのか伺うと、「清瀬にも図書館などで読み聞かせの活動をしている方々がいます。機械は便利ですが、心の温かさまでは伝わってこない気がします」とのこと。「本を読んでもらったり自分で読んだりし、たくさん楽しい体験をした人はそれが宝物になって、おとなになってからも豊かな人生を過ごすことができると思っているわ」と話されました。

ましまさんの描いた絵本の一部

使用する絵の具などの一部

想像力を大切にしてほしい

『人生は一冊の物語』という言葉を聞いたことがありますか？　人間には想像力が大切だと思います。自分の未来の夢に向かって、いろいろと想像して努力することが大事なのではないかと思っているわ」とほほえむましまさん。「人に迷惑をかけたりすると、それを本人は認識しているので、自分の人生の物語に自分で傷を付けることになると思うし、自分の行動からどんな反応が返ってくるのかということも想像してくださいね」とのこと。

最後に今後の活動予定を伺うと、「やりたいことがいろいろとあります」と目を輝かせるましまさん。「来年の春までに3冊出版する予定なの。今、最後の一つに取り組んでいるところなのよ」と教えてくれました。

※　児童文学作家・翻訳家。欧米の児童文学の翻訳を手がける一方、絵本や児童文学作品の創作も行い、日本の児童文学普及に貢献した。

読書の秋に、絵本はいかがですか

中央図書館には「清瀬市の作家コーナー」が常設されており、ましまさんの作品もご覧いただけます。童心にかえり絵本を楽しみませんか。

問合せ　中央図書館☎493・4326